

## 天文民俗調査報告(2013年)

北尾 浩一\*

### 概要

2009年より天文民俗調査報告を開始してから5年目となった。年々、調査は困難になっていくが、2013年においても日々の暮らしのなかで形成された日本古来の伝統的な星名伝承を記録することができた。主な成果は次の通りである。

- ・八丈島において、カノープスの和名「酔いどれ星」を記録することができた。
- ・星が登場するショメ節を記録することができた。

野尻抱影氏著『日本星名辞典』等に掲載されていない新たな星名伝承を記録することができ、厳しい状況ではあるが、天文民俗調査の重要性はますます増大している。

### 1. はじめに

1978年、新潟県佐渡郡相川町姫津(現 佐渡市)より星の伝承の調査をはじめてから36年目になった。調査を実施した地域は、「関東」「東海」の島嶼部である。

### 2. 調査の概要

#### 2-1. 調査方法

漁業に従事した経験を持つ高齢者(おおむね昭和15年以前の生年)を中心にインタビュー調査を行なった。最も高齢の伝承者は大正12年生まれ、最も若い伝承者は昭和22年生まれであった。

#### 2-2. 調査地

2013年は、次の7箇所です星名の記録を行なうことができた。

- ・1月…東京都八丈島八丈町三根、大賀郷、檜立、中之郷、末吉
- ・3月…愛知県知多郡南知多町篠島
- ・5月…東京都神津島村

### 3. 各地域の星名伝承

2013年に各地域で記録した星名伝承の概要は、以下のとおりである。

#### 3-1. 関東

八丈島及び神津島の調査を実施した。

##### (1) 八丈島八丈町大賀郷

明けの明星の和名「メシタキボシ」を記録した。「月が出る時、沈む時とか、トビウオが浮き上がってかかる」「メシタキボシって、昔、言っていた。夜が明ける、メシタキボシ、メシタキボシ、夜が明ける、言って。メシタキボシ出てきたら漁終わり」(話者生年、昭和22年)

##### (2) 八丈島八丈町中之郷

カノープスの和名「ヨイドレボシ(酔いどれ星)」を記録した。

「ヨイドレボシって言わなかったか。赤い星。うちのばあさんから聞いたような。酔いどれ星、赤い顔しているという意味かな…」(話者生年、昭和15年)

酔いどれで赤い顔をしているように、低空で赤く見えることから酔いどれ星と記憶をたどった。

##### (3) 八丈島八丈町檜立

スバルの登場するショメ節を記録することができた。「アアア 月は東にスバルは西に 思うとの(殿)ごはまだ江戸に一 ショメショメ」(話者生年、昭和13年)

##### (4) 八丈島八丈町末吉

オリオン座の和名「オヤカツギボシ」とスバルの登場するショメ節を記録することができた。

「オヤカツギボシ、言っていた。明治4年生まれの父親が言っていた。オリオンの三つ星だけ。冬」

「やー 月は東に、スバルは西に、思うとの(殿)ごはまだ江戸に～ ショメショメ」(話者生年、昭和6年)

\*中之島科学研究所  
kitao@kagaku-shinko.org

また、末吉には、六夜様(二十六夜様)のとき、ローソクが何本か立っているように月がのぼってきたと伝えられていた。(話者生年、昭和18年) 海が橙色になっていく。上がり具合によって船の形になったり、ローソクが灯ったようになったりしたとも伝えられていた。(話者生年、昭和6年)

六夜様(二十六夜様)のとき、隣のおばさんは線香をあげていた。月出るとき、海から出る。末吉だけ海から出る。のんびり食べたり飲んだり、親戚、近所集まって。そして、月の出、2時頃になったら、それぞれで海の見えるところに行った。村で一箇所に集まるのでなく、それぞれの家で六夜様を行なった。

いもにならない品(しな)の悪いのをね、切干(きりぼし)にしたのをこしらえながら、もうミツナリサンがあがりよったよ〜と言いよった。カンナで切る」

「まだらの星、こうかたまってあつたら、ジャンジャラボシ。かたまって、ミツナリサンの近く。10個くらいだろうか。ジャンジャラボシ。ジャンジャラボシは、ミツナリサンほど明るくないよ。ジャンジャラボシ、かたまっている。これがジャンジャラボシだな、と教えられたけどな。ミツナリサンよりちっちゃいかも」(話者生年、昭和5年)

ミツナリサンについて、次のような伝承も記録した。「ミツナリサン、3つ並んでいる。特別光る。3つ見える。まっすぐ。子どもの頃、暗くなるまで、牛が食べるカヤを刈りにいった。暗くなると、ミツナリサンとお母さんが言った」(話者生年、昭和9年)

石田光成の残党が3人で神津島に逃げてきたと伝えられている。石田光成のお母さんを連れてきたという伝説もある。ミツナリサンは、三成の残党3人と関係があるのだろうか。

なお、ミツナリサンとともにミツボシと呼ぶケースもあった。

「ミツボシ。時間を知ったり、年寄りがしていたようだが、経験はない。名前は、ミツボシと聞いていた」(話者生年、昭和12年)

清水昭男氏を通して、大正12年生まれの漁師さんの「トビアガリ」(明けの明星の和名)の思い出を聞くことができた。

「『もうトビアガリがでたからそろそろ漁に出ようか』と、漁師仲間がおじいさんを起こしにきたのを、子どもの頃、布団のなかから聞いていた」

大正12年生まれの漁師さんの祖父は、星を見て天気予報をする名人で、「天文」と呼ばれていた。前日の午前中に伊勢エビの刺し網を入れて、鉛で固定し、翌朝、トビアガリの出る頃に起きて、日の出前明るくなる頃に刺し網をあげにいったのである。

また、二十三夜塔が祀られており、秩父山の上に二十三夜の小屋があったと伝えられていた。



神津島の二十三塔

スバルの登場するシヨメ節(八丈島八丈町榎立)

採譜者 北尾正子



スバルの登場するシヨメ節(八丈島末吉)

採譜者 北尾正子



### (5) 神津島村

オリオン座三つ星の和名「ミツナリサン」、プレアデス星団の和名「ジャンジャラボシ」を記録した。「ミツナリサンって、同じように並んで出る。11月頃。同じような間隔で出る。縦に。ミツナリサンが出てきたよ、と、だんだんこっちに。私がな、さつまいもの、さつま

### 3-2. 東海

愛知県知多郡南知多町篠島の調査を実施した。明けの明星の和名「チャータキボシ(茶炊き星)」、オリオン座三つ星の和名「サンコサン」を記録した。

「夜明けの星がのお、東のほう、夜明けの星、チャータキボシいうてのお、朝のお茶を沸かす時間、上あがると。朝、漁師はみな朝はやいから。チャータキボシいうたけどな」

「サンコサン、あれなんだか、覚えないなあ。3つ並んどって、サンコサンいう。3つ並んでいるのでサンコサン。確か縦だと 思ったな」

「サンコサン、たいがいヨアサ。8月、9月…」  
(話者生年、昭和4年)

また、昭和12年生まれの話者は、「サンコサン、どの高さあがると何時… サンコサン、星3つ明るい。3個、順に並んでいる。季節で横になったり縦になったり。サンコサン、いま、冬は真上きている。サンコサン、夏は、ヨアサにあがる。サンコサン、あれがこれぐらいあがったら、夜が明けるいうてな」というように、時間の目標にした。プレアデス星団の和名は、「スワリサマ」と伝えていた。

### 4. 特筆すべき星名伝承

八丈島、神津島において記録した特筆すべき星名伝承について、他地域と比較検討を行なった。

#### (1) カノープスの和名 - 酔いどれ星

カノープスの和名は、千葉県、静岡県、さらには三宅島において、次のようにメラボシが広く伝えられている。

千葉県…勝浦市(野尻 1973)、鴨川市浜荻、鴨川市太海、南房総市白浜、南房総市砂取(草下 1982)、館山市布良、相浜、船形

東京都…三宅島坪田村(現 三宅島三宅村)(内田 1949)

静岡県…田方郡伊東町(現 伊東市)(内田 1949)、富士郡元吉原村(現 富士市)(内田 1949)

本調査においては、三宅島まで広く分布していた和名メラボシではなく、酔いどれ星という他に例を見ない和名を記録することができた。

酔いどれ星は、酔いどれ赤い顔をしているように、赤く見えるという色に由来する名前である。

カノープスは本来は薄黄であるが低空のため赤色に見える。しかし、色にもとづく和名は、次のような事例があるものの広く分布していない。

#### ・アカボッサン(赤星さん)

香田寿男氏による。岐阜県奥揖斐の和名。さそり座アンタレスとカノープスをともに「アカボッサン」と呼

んでいる。

#### ・エヌグボシ(絵の具星)

香田寿男氏による。岐阜県の奥揖斐の和名。

和名の意味…絵の具-ぎらつく虹のような色彩の形容ででしょうか。あるいは今は磨滅してしまったなにかの方言なのでしょうか。

見える方向…オリオンのはるか下方、揖斐の山口からいいますと、大垣市、赤坂町のすぐ上に、ほんのしばらく動いて沈む赤い星。

香田氏によると、昔、揖斐郡が物質輸送を舟運に託して森前・井の口・前島・桑名の定期船が揖斐川を上下していた頃に船頭さんが方位や時刻をはかるのに用いた星である。なお、野尻抱影氏著『日本星名辞典』に、絵の具星がシリウスの和名となっているのは誤りである。

一方で、水平線から高くのぼることは決してなく限られた時間しか存在しないという動きにもとづいた和名は、次のように広く分布している。

#### ・ドウラクボシ(道楽星)

桑原昭二氏による。淡路島の南側の沼島(兵庫県南あわじ市)の和名。名前の由来については、「この星はちょっと上ってすぐに入ってしまうのでこの名がある」と記録。(桑原 1963)

#### ・ミツチャナボシ

桑原昭二氏による。兵庫県南あわじ市福良の和名。名前の由来については、「みつちやなというのは、やくざのことで、あまり長く出ずにすぐに入ってしまうので、ちょうどやくざが顔だけ出して、ピンをはねてゆくの似ているのでこの名がある」と記録。(桑原 1963)

#### ・オーチャクボシ(横着星)

磯貝勇氏が、岡山県瀬戸内市牛窓町において記録した和名。『瀬戸内海島嶼巡訪日記』に、「横着星。一寸出て直ぐに引っ込むといふ」と掲載されている。(アチックミュージアム 1940) 筆者は、広島県三原市古浜において記録。

#### ・フヨタロー(不用太郎)

山口博物館の中島彰氏、松尾厚氏によると、山口県長門市にはフヨタローという星名が伝えられている。漁をしているとき、夜明け前に三隅(みすみ)のほうから昇るが、1間か2間くらいの高さまでしかのぼらずに1時間?くらいで沈む。他の星のように上のほうまで高くのぼっていかないで、ちょっとのぼってすぐ沈むことから『フヨタロー』と呼んだ。フヨタロー(フョータロー、不用太郎)とは、『不精者』『怠惰な人』という意味である。

したがって、酔いどれで水平線から高くのぼることは決してなく限られた時間しか存在しないで沈んでいくという動きにもとづいて「酔いどれ星」と呼んだ可能性もある。

#### (2) プレアデス星団の和名ージャンジャラボシ

『日本星名辞典』によると、ジャンジャラボシが伊豆利島(東京都利島村)に伝えられている。(野尻 1973) また、三上晃朗氏は、神奈川県横浜市柴でジャンジャラを記録した。三上氏は、「仮にプレアデス星団の星の集まりを鈴の塊と見たならば、夜空に響くすき通った鈴の音が聞こえてくるようである」と指摘している。(星の民俗館ホームページ) 本調査で、神津島においてもジャンジャラボシが伝えられていることが明らかになった。採録事例が少なく和名分布の状況については、今後の課題である。

#### (3) オリオン座三つ星の和名ーミツナリサン

『日本星座方言資料』によると、神津島村において記録したオリオン座三つ星の和名「ミツナリサン」が次のように静岡県地方に分布する。

・静岡県賀茂郡稲生澤村河内(現 下田市)、田方郡下大見村下白岩(現 伊豆市)、北狩野村年川(現 伊豆市)

一方で、オリオン座三つ星に小三つ星を加えた和名「ムツナリサン」が次のように分布する。

・静岡県賀茂郡南上村市之瀬(現 南伊豆町)、竹麻村湊(現 南伊豆町)、三坂村一色(現 南伊豆町)、三濱村妻良(現 南伊豆町)、仁科村中(現 西伊豆町)、稲梓村(現 下田市)、宇久須村(現 西伊豆町)、田方郡西豆村小下田(現 伊豆市)、土肥村大藪(現 伊豆市)

したがって、ミツナリサン、ムツナリサンとも数を由来とする和名であり、石田三成から生まれた和名ではないと思われる。神津島以外に分布することからも三成が形成の由来であるとは考えにくい。但し、後になって、ミツナリサンという和名が、逃げてきた三成の残党と結びつく可能性は否定できない。

#### (4) 星の登場するショメ節

八丈島の俚謡は、ショメショメと唄の終わりで囃すことからショメ節という。唄うとき、唄う人によって自由に歌詞が変化する。『日本星名辞典』によると、末吉において記録した「やー 月は東に、スバルは西に、思うとの(殿)ごはまだ江戸に～」というショメ節とほぼ同じの「月は山端にすばりは西に、思ふ殿御はまだ江戸に」が八丈島の上湊、底戸湾附近の盆踊り唄として伝えられている。(野尻 1973)

また、『日本星名辞典』には、類似の俚謡が掲載さ

れている。「殿」のケースと「殿」以外のケースに分けて引用する。

#### ① 「殿」のケース

- ・月は東にすばるは西に、いとし殿御はまん中に丹後
- ・お月<sup>ア</sup> 山端にすばる星<sup>ア</sup>西に、思ふ殿御はその中に 島根
- ・お月やまだ(ママ)にすまる星は西に、かわいお殿はまん中に 愛媛県大三島

#### ② 「殿」以外のケース

- ・月は山端にすばるは西に、思ふお前はまだ江戸に加賀
- ・月は山端にすばるは西に、思ふしよ様を膝元に日向

共通点は、東あるいは山端に月、西の空にプレアデス星団(すばる、すばり、すまる)が輝く光景を見ながら、遠くにいる男の人を思うという点にある。

『日本星名辞典』によると、丹後のものは茶摘み唄、加賀、日向のものは盆踊り唄である。唄われた時季に、東空に月、西空にプレアデス星団を見ることが可能となるのであろうか。茶摘みの最盛期である八十八夜(5月2日頃)の頃の日没後なら、東空に満月近くの月、西空にプレアデス星団を見ることが可能である。しかし、盆の頃はそのような光景とはならない。明け方にスバルが西空に見えるのは、盆ではなく、11月頃～となる。なお、実際は、宴会等で季節に関係なく唄うと筆者は記録した。

## 5. おわりに

本調査を実施するにあたって、八丈町教育委員会の林薫氏、神津島観光協会の覺正恒彦氏、神津島在住の清水昭男氏、東海汽船の山本忠和氏をはじめ、多くの方のご指導、ご教示をいただくことができた。紙面を借りてお礼を申し上げます。

### 参考文献

- 野尻抱影:1973, 日本星名辞典, 東京堂出版  
 内田武志:1949, 日本星座方言資料, 日本常民文化研究所  
 桑原昭二:1963, 星の和名伝説集ー瀬戸内はりまの星ー, 六月社  
 草下英明:1982, 星の文学・美術, れんが書房新社  
 アチックミュージアム:1940, 瀬戸内海島嶼巡訪日記  
 アチックミュージアム  
 三上晃朗:星の民俗館ホームページ